

基金ホームページURL ● <http://www.jkcf.or.jp>

発行 財団法人 日韓文化交流基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号

虎ノ門ワイコービル3F

電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326

発行日 2007年3月30日

青少年交流事業が16,000名に達する

日韓文化交流基金が平成元年度(1989年度)から実施してきた青少年交流事業の参加者は、平成18年度(2006年度)末において、累計16,000名に達しました。

これまでの実績は訪日のがべ10,500名、訪韓のがべ5,500名に上ります(右下表参照)。主な内訳をみると、訪日が大学生3,124名、教員1,606名、平成11年度から実施の中高生3,404名、ボーイスカウト・ガールスカウト1,274名。訪韓は大学生1,863名、教員1,439名、中高生1,911名です。

当基金の青少年交流事業は、対話を通じて相互理解を深めるさまざまなプログラムを行っています。訪日研修を例にとると、学校訪問や文化・社会事情の視察、ホームステイなどで構成されています。

特に教員・大学生の訪日研修で行うホームステイは日本のイメージを左右する重要な行事となっており、韓国の参加者からは毎回、一番印象深かったと高い評価を受けています。

今後、当基金としては、さる1月フィリピンで開催された第2回東アジア・サミットにおいて安倍総理が発表された「東アジア青少年大交流構想」の枠内で、日韓間の青少年交流を引き続き拡充していき、特に日程中の核となるホームステイはより一層拡大できるよう、努力していきたいと考えています。学校、団体、ホストファミリーなど関係者のみなさまには、今後ともお引き受けをお願いするとともに、ますますのご協力をお願いいたします。



対面式で一緒に歌うホストファミリーと韓国大学生

青少年交流事業実績

年度	招聘(韓国→日本)							派遣(日本→韓国)						(名)
	教員	大学生	その他	中学生	高校生	スカウト	小計	教員	大学生	その他	中学生	高校生	小計	
1989	16	145	34	—	—	—	195	20	137	0	—	—	157	352
1990	100	246	81	—	—	—	427	106	108	69	—	—	283	710
1991	79	207	93	—	—	—	379	104	108	59	—	—	271	650
1992	80	189	125	—	—	—	394	102	104	32	—	—	238	632
1993	100	193	116	—	—	—	409	101	106	36	—	—	243	652
1994	120	201	104	—	—	—	425	124	136	34	—	—	294	719
1995	117	214	120	—	—	—	451	125	105	29	—	—	259	710
1996	118	216	111	—	—	—	445	120	106	0	—	—	226	671
1997	98	218	111	—	—	—	427	96	103	0	—	—	199	626
1998	98	137	50	—	—	—	285	78	79	0	—	—	157	442
1999	100	177	75	208	281	174	1015	76	97	15	—	—	188	1203
2000	100	188	35	209	284	171	987	79	99	0	121	205	504	1491
2001	100	118	35	211	285	171	920	38	120	15	108	105	386	1306
2002	100	167	0	211	284	171	933	80	100	0	106	208	494	1427
2003	100	160	0	212	288	171	931	71	107	0	106	207	491	1422
2004	100	149	0	214	287	172	922	40	110	0	106	210	466	1388
2005	40	99	0	106	107	121	473	39	70	0	105	106	320	793
2006	40	100	0	109	108	123	480	40	68	0	110	108	326	806
合計	1606	3124	1090	1480	1924	1274	10498	1439	1863	289	762	1149	5502	16000

日韓文化交流基金懇談会

1月10日（水）に、日韓文化交流基金懇談会を開催し、梅田博之先生の講演「言葉の学習を通じた日韓間の交流」を行い、多数のご来場をいただきました。

「先人の交流の
関係から学ば
べきことは多い」
と語る梅田博之
先生



「日韓文化交流基金懇談会」は、日韓文化交流基金の事業や日韓文化交流について、基金の活動にご関心のある方と交流する機会として企画したもので、毎回ゲストスピーカーをお招きし、ご専門のテーマの講演を行います。

今回は、梅田博之先生（麗澤大学学長・当基金維持会員）から、日韓の相互の言語学習史と、そこに現れた両国の交流の様相についてのお話をうかがいました。

講演要約

日本と韓国との間には今まで「交流の三大ブーム」と言えるような三つの時期があり、もっとも古くは渡来人による文化の受容が進んだ古代、そして中世・近世の文禄・慶長の役／壬辰倭乱から朝鮮通信使の往来の時期、そして、三番目が「韓流」ブームに見られる現代である。

古代の交流

古代における渡来人による文化受容の密な状況にもかかわらず、朝鮮半島の言語から借用され古代日本語に入った語として跡付けられる例はテラ〈寺〉tyal, コホリ〈郡〉kavalなど意外に少ない。また、日本語と韓国語の系統関係についても類似の語例が少なく確実なことは言えない。ただ、現代韓国語が直接遡及できるのは新羅語であるが、日本語または新羅語と高句麗語の共通点を指摘して、日本語と韓国語の関係を考える上で高句麗語をミッシングリンクと考える学説もある。

両国とも漢字を導入して書写手段としたが、受容の過程で自国語を表記するための方法をそれぞれで発達させた。史読と宣命書き、郷歌と万葉仮名、口訣と訓点、漢文訓読法など共通点も多く、朝鮮半島からの影響が考えられる。

その後、日本では漢字の草書体から平仮名が、省略体から片仮名が作られ、仮名文体・漢文体・漢文訓読体・国漢文混淆体など多様な書写スタイルが生じた。韓国では15世紀中葉に至り漢字とは別にハングルを創製し、漢字の使用は漢語や漢文の表記に限

定され、訓読が一般化せず、漢文体とハングル体は別個に使われ、開化期に至って国漢文混淆体が生じた。

ハングルはアルファベットと同じ音素文字だが、音節単位にまとめて書く音節文字でもある。また、基本字に対して画を加えることで同じ系列の異なる発音を表す方法で作られ、音素をさらに分析した音韻素性を表す素性文字という性質も持ち、多彩な性格を持った優れた文字といえる。江戸時代の国学者が漢字伝来以前から日本に存在したと主張する「神代文字」の中には、明らかにハングルの影響を受けているものもあり、興味深い。

中世・近世韓国の日本語学習 — 『捷解新語』

中世・近世の文化交流においては、文禄・慶長の役／壬辰倭乱の影響が大きい。代表的な事例が、儒者姜沆の指導による日本朱子学の成立と、朝鮮通信使の通事も務めた訳官康遇聖の日本語教材作成であり、いずれも日本で虜囚生活を送っている。その他、韓国語を片仮名で書きとめた日本側の従軍記や、漂流民からの聞き書きなどの交渉の記録があるほか、新井白石の『東雅』をはじめとし、江戸時代には朝鮮研究がかなり進んだ。

康遇聖は帰国後科挙の訳科に合格し、日本語教育に従事し、教科書『捷解新語』を編纂した人物である。朝鮮王朝の外国語教育機関「司訳院」では、漢学、蒙学（モンゴル語）、女真学（満州語）とともに

「倭学」として日本語が学ばれ、初期の教科書は『伊呂波』、日本の寺子屋の教材、辞典の『倭語類解』などであった。『捷解新語』は1676年ごろに成立したと考えられ、釜山倭館での交易の際の会話、通信使の日本往還の際の会話から成り、巻末に国尽しと候文による書簡文が収録されている。貿易や外交の実務に即した実用的な内容であり、当時の両国の交流の実態が生き生きと表れている。本書の日本語が「母語の影響による誤用が多い」とする日本の著名な研究者たちの指摘に対して、そのいくつかは当時文法的であり、またハングルの誤植によるもの、過剰訂正によるものもあるとする韓国人留学生の研究が注目される。

近世日本の韓国語学習—雨森芳洲

一方、近世日本の韓国語学習では、対馬藩の儒者雨森芳洲の功績が大きい。芳洲は35歳で朝鮮に渡り、3年間釜山の倭館で語学や文化・事情などを学んだ後、対馬に戻って通訳養成や教材の整備に尽力した。芳洲が作成した教材には『全一道人』や明治初年まで使われた『交隣須知』などがある。対朝鮮外交の基本として「誠信の交わり」を常に説き、「欺かず、真心をもって交わる」ことを繰り返し主張した。

『全一道人』には、文字と発音・単語と句・文化・実用会話の四段階の教材の作成、文化の学習、文法的な境界での発音と文字の乖離への留意、早期教育や母語話者の重視、方言の差異に注意しソウル（みやこ）の言葉を学習すべきだという芳洲の語学教



参加者は日韓の言語学習史に熱心に耳を傾けた



講演後の懇親会

育の考え方が示されている。最近、東大小倉文庫所蔵の写本『諺文』が芳洲の文字と発音に関する教材に当たる、との研究が韓国の若手研究者により発表され、注目されている。また、「両国の友好関係で通訳ほど重要なものはない。言葉さえできれば通訳ができると思われているが、決してそうではない」とも述べ、通訳は相手の国の精神文化、事情、歴史などをすべて心得ていなければ勤まらなないと説いている。こうした芳洲の語学教育論は、現代でもそのまま通用するものである。

国際交流・語学学習と相互理解

日韓の長い交流の歴史の中で、お互いの言葉を習おうとする真摯な努力があったことをここで強調しておきたい。言語は思考と密接な関係があり、人間は言語を手がかりに外界の事物を把握し概念化していると言える。言語こそはすべての文化の基礎であり、言葉を習うことによって相手の国の人々の考え方や文化の基礎を理解することができる。幸い、現代の韓流ブームは単にドラマ等の文化的作品を好むだけでなく、言葉を学び、隣国の人々と交流するレベルにまで深まっている。語学学習・交流と相互理解の深度には高い相関性があることは、社会言語学の研究によって立証されているところである。学術・文化の分野や一般市民レベルでの交流の拡大、そしてお互いの言葉を学ぶ努力の積み重ねによって、友好と相互理解を深めていきたいと思う。

2007年度助成対象事業

2007年度助成対象事業の募集には112件の申請があり、この中から52件への助成が決定しました。

青少年・草の根交流（日韓共同未来プロジェクト） 29件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
日本の都市における条件不利地域の地域再生と居住支援に関する交流	ホームレス居住支援と社会的包摂研究会	4/22 - 25	大阪
“함께 =ともに” 高校生平和特派員	“함께 =ともに” 高校生平和特派員実行委員会	5/3 - 6	名古屋
日韓青少年文化交流研修活動2007	財団法人 こども教育支援財団	5/28 - 6/2	近畿圏内
帯広一堤川 日韓美術文化交流事業	平原社美術協会	7/12 - 17	帯広・藤丸
日韓青少年交流訪韓団	日韓親善協会中央会	7/22 - 27	ソウル、光州、釜山ほか
日韓両国の大学生による演劇「橋（The Bridge）」共同制作	特定非営利活動法人 沖縄県芸術文化振興協会	7/26 - 29	沖縄市民会館
「韓国の友だち、アンニョンハセヨ！」—小学生ホームステイ交流2007—	特定非営利活動法人 多言語広場 CELULAS（セルラス）	8/1 - 7	馬山・虎溪初等学校
第3回漢江清掃大作戦	特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会	8/1 - 8	京畿・常緑村、ソウル近郊漢江流域
第13回山口・公州ジュニア交流隊	社団法人 山口青年会議所	8/2 - 5	山口
日韓子ども国際交流体験2007	日韓子ども国際交流体験実行委員会	8/3 - 6	麗水・新基初等学校
韓日バイカモ保全青少年環境探検隊交流事業	特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島	8/4-7（訪韓）、8/18-21（訪日）	仁川・江華島、静岡・三島
第3回 国際学生フォーラム「東アジア経済統合」	国立大学法人 大分大学経済学部	8/6 - 10	梨花女子大学校
済州青年訪日研修団員との相互交流訪韓事業	愛知県青年国際友好協会	8/10 - 13	済州
Study Trip from Korea to Japan 2007	The Asian Law Students' Association Japan(ALSA Japan)	8/15 - 24	国立オリンピック記念 青少年総合センターほか
第15回日韓歴史教育交流会～名古屋シンポジウム～	日韓教育実践研究会	8/18 - 19	名古屋・南山中学高校女子部
21世紀の日韓こども通信使派遣事業	21世紀の日韓こども通信使実行委員会	8/18 - 28	大阪、東京、山口ほか
立教・延世・慶應・復旦 リーダーシップ・フォーラム2007	学校法人立教学院 立教大学国際センター	8/20 - 25	立教大学（新座キャンパス）
「近代移行期における東アジアの民衆のあり方を比較し、連関を考えるための国際的ネットワーク」構築のためのワークショップ	アジア民衆史研究会	8/24 - 27	ソウル・歴史問題研究所
07日韓車いすプロジェクトS	大森学園高等学校・空飛ぶ車いすボランティア部	8月	ソウル、釜山
第43期 日韓学生交流プログラム	日韓学生交流	8月	韓国
日韓青少年ESD（国連持続可能な開発のための教育）活動交流会	下関ユネスコ協会	8月	山口
日韓グループ文化交流	はなこりあ	9/20 - 24	ソウル
日韓で学びあう草の根図書館づくり活動	川崎の図書館ともの会	10/28 - 11/1	川崎、東京
日韓交流おまつり2007参加交流事業	青森空港国際化促進協議会	10月下旬	ソウル
日韓大学演劇大使	横浜国立大学教育人間科学部	11/10 - 20	横浜国立大学
韓国伝統芸能 青少年育成企画「サタデーチャンゴフィーバー！」	サタデーチャンゴフィーバー！実行委員会	11/14 - 16	東京・池袋みらい館大明ほか

事業名	申請団体	実施時期	場 所
高校生フォーラム・ハナ	ハナ実行委員会	12/22 - 26	横浜
韓国と日本の現代写真ワークショップ&セミナー	韓日の女性の視点による 現代写真展実行委員会	2008/1/17 - 30	ソウル・サムジースペースほか
日韓共同ゼミ	特定非営利活動法人 劇研	2008/1/20 - 2/28	京都・アトリエ劇研、ソウルほか

シンポジウム・国際会議 15件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
日韓代案教育シンポジウム	特定非営利活動法人 東京シュレー	4/27 - 5/4	ソウル市立青少年職業体験センター
日本と韓国における 教員の社会・文化的比較シンポジウム	東京学芸大学教員養成 カリキュラム開発研究センター	5/16 - 19	東京学芸大学
日・韓次世代学術FORUM 第4回国際学術大会（東京大会）	東西大学校	6/22 - 25	城西大学（東京紀尾井町キャンパス）
日韓共同学術会議「日本と韓国における 憲法と民主主義：理論・歴史・展望」	政治思想学会	6/28 - 30	早稲田大学
第3回日韓文学交流「詩の祝祭」	日韓詩人文学交流協会	7/28	東京・アルカディア市ヶ谷
島崎藤村学会・日本語学会国際学術大会	日本語学会	8/10 - 12	関西学院大学
ECAP（Educator's Collaboration of Asia-Pacific） 英語による小中学生対象日韓文化交流のつどい	特定非営利活動法人 イー・ドリームズ	8/13 - 15	国立オリンピック記念 青少年総合センター
ASLE日韓合同シンポジウム	ASLE-Japan／ 文学・環境学会	8/19 - 21	金沢大学（角間キャンパス）
日韓相互理解セミナー	一橋大学ホッケー部	8/24 - 27	一橋大学ほか
日本・韓国の新たな学術基盤の共有を目的とする国際シンポジウム（18-19Cの日本・韓国の学問・政治・宗教・科学）の開催	東北大学大学院文学研究科 日本思想史専攻分野	8/31 - 9/1	東北大学
第2回RiCKS韓国映画フェスティバル 「崔岷植の映像一映画で見る韓国社会」	立命館大学コリア研究センター	10/26 - 28	立命館大学（朱雀キャンパス）
日本人高名俳人による講演会と日韓俳句大会	Seoul Japan Club <SJC>	11/9 - 10	ソウル・在大韓民国日本国大使館 公報文化院
東アジアにおける鉄文化の起源と伝播に関する 国際シンポジウム	東アジアにおける鉄文化の起源と伝播 に関する国際シンポジウム実行委員会	12/1 - 2	北九州市立自然史・歴史博物館
前近代日朝関係の友好と摩擦 —医薬・焼きもの・通信使—	朝鮮王朝実録講読会	12/15 - 16	九州国立博物館
東京芸術見本市2008「韓国セミナー」	NPO法人 国際舞台芸術交流センター	2008/3/5 - 8	東京・恵比寿ガーデンルーム

芸術交流 8件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
BATI-HOLIC 韓国芸術交流	BATI-HOLIC（バチ・ホリック）	7/19-22	ソウル・在大韓民国日本国大使館 公報文化院、漢陽女子大学ほか
アジア児童青少年演劇フェスティバル2007 （第1回アジア児童青少年演劇フェスティバル）	有限会社 劇団かかし座	7/21-25	ソウル・大学路
池の下 韓国公演	池の下	7/28-8/12	慶北・密陽、京畿・水原
珍島と沖縄の伝統芸能の交流、 体験ワークショップおよび講演会	在日本韓国YMCA	8/26-28	東京・在日本韓国YMCA地下ホール
翁長洋子箏曲院琉球音楽韓国公演・ワークショップ	翁長洋子箏曲院	9/9-13	ソウル・在大韓民国日本国大使館公報 文化院、ソウル日本人学校ほか
小坂泰子写真展「双国の貌」～日本と韓国の石仏～	財団法人 せたがや文化財団	10/22-11/2	ソウル・在大韓民国日本国大使館 公報文化院
日本、韓国合同企画 現代アート交流展『母体と生命』	DANCE AND MEDIA JAPAN （ダンス・アンド・メディア・ジャパン）	11/1-14	ソウル
第9回日本音楽教育学会ゼミナール ～日韓合同ゼミナール～	日本音楽教育学会（日韓合同 ゼミナール実行委員会）	2008/1/11-13	日本女子大学

日韓現代作家シンポジウム 「文学の新地平—記憶・境界・メディア—」開催

高麗大学校中日言語文化教育研究団研究専任講師 金青均

日韓の現代作家による 文学の現状と展望

昨年11月10日高麗大学校にて、高麗大学校日本学研究センターと在韓民国日本国大使館公報文化院との共催で、「日韓現代作家シンポジウム〈文学の新地平—記憶・境界・メディア—〉」が開催された。本シンポジウムは、21世紀を迎え、急速な情報化とインターネットや双方向メディアの普及にともなって激変している社会的・文化的状況の中で、人間の表現活動としての文学の現状と展望について議論する目的で開かれた。韓国と日本の著名な作家、申京淑氏、具孝書氏、島田雅彦氏、桐野夏生氏を招請し、個別発表と総合討論の順に進行した。

第1部では、4人の作家の個別発表が行われた。島田氏は、「作家には教育や政治、メディアなどによって空疎化した言語を蘇生させる役割がある」と指摘した。また申氏は、「小説を書くことは変わっていくすべての瞬間に立ち、人間とは何かについて探求することだ」と述べた。桐野氏は、「小説は、現実とは何かを考えるために存在するのであり、現実には勝つために存在するとは言えない」と主張した。最後に具氏は、「今日のメディアは双方向化し、メディア独占の時代は終わりつ



シンポジウムへは大学生から一般まで多くの参加があり、文学作品を身近なものとして楽しんだ

つある。それに連動して文学においても、既存の文壇の枠にとらわれない作家が登場するようになった」と述べた。

母性神話を巡って／ メディアの進歩と文学

第2部の総合討論では、まず母性と母性神話を巡って作家の創作意識との関連から意見が提示された。桐野氏は、「自身の創作の問題意識の一つに男性中心主義社会が作り上げた母性神話を解体することがある」と言った。これに対して申氏は、「可哀相なものについての憐憫は人間の本能のようなもので、それは母性に繋がる。そのような意味で、母性は創作の原動力になりうる」と語った。

さらに討論の対象になったのは、マルチメディア時代の文学の展望についてであった。具氏は、「メディアの進歩によって、芸術の諸要素の相互作用は加速化していく。その流れの中で、文学においても、予測しがたい新しい形態のものが出現するだろう」と述べた。また島田氏は、「文学はそもそも発表の形態によって変わってきた。しかし、昔も今も文学は、人間の本性を探究するという点においては変わりはない。ある意味で、未来は過去の反復である。ただし、未来の文学は、過去に存在した文学のうち、価値のあるものが反復されることを願っている」と述べた。

司会の金春美教授（本学日本学研究センター長）は「韓国と日本の作家シンポジウムは10年ほど前にも開催されたことがある。以前に比べて、今回のシンポジウムでは韓国と日本の作家の間に相違点はあまりみられなかった。



日韓両国ともに文学の衰退が叫ばれる中、両国の文学が多くの課題を共有しているとの認識も確認された

これは両国の文学がともに普遍性を獲得しているということを立証するものだろう」と、韓国文学と日本文学の共通性を確認し、総合討論を締めくくった。

文学を身近に楽しむ

文学研究者はもちろん、韓国と日本の文学に関心のある大学生や一般人も大勢シンポジウムに参加し、盛況を呈した。島田氏と桐野氏は発表時間の一部を割いて、それぞれ自作の詩と小説を朗読し、多くの聴衆を魅了した。また総合討論では、傍聴席から作家への質疑も行われ、作家から作品世界と文学観について直接話を聞く有意義な機会となった。参加者からは、「文学作品を親近感のわくものとして味わえた」という声が上がった。本シンポジウムは、文学を楽しむ場であったと同時に、韓国と日本の文学の現状と将来を展望する上で、意味深く成果の多い学術交流の場であった。

PROFILE

キム チョンギョン



高麗大学校中日言語文化教育研究団研究専任講師。同大学校日本学研究センター研究員。東北大学大学院国際文化研究科博士課程修了。専門は日本近代文学、比較文化論。

プラスギャラリーの活動を始めてまもなく、運営メンバーの友人の韓国人アーティスト、キム・キラ氏の個展を企画した。彼が下見で訪問した際に、韓国・暎園大学の学生や卒業生と日本の若手作家の交流企画が持ち上がり、2005年に韓国で「What's in your bag?」展を、翌年日本で「Is my bag empty?」展（日韓文化交流基金助成）を開催した。こういった交流は大学間でする場合が多く、自分たちのように経済力も人力もない活動体でできるのかと不安だったが、逆に大きな組織よりもフットワークが軽く柔軟に動ける自分たちだからできることもあるのでは、と考えてこの交流を始めた。

韓国作家のタフさに脱帽

韓国側と話し合って「質の高い展示」+「人物交流」を目標に、それぞれの国で一度ずつ展示をする、作品は参加者が持参して共同作業する、パートナーシップ制度で互いにホームステイすることなどを決めた。日本作家の打ち合せでは「お金をいくら持っていたらよいのか」といった幼稚な質問が出て不安を感じたが、実際に行ってみると韓国側の充分なサポートのお蔭で大きな問題はなかった。しかし予定がすぐ変更される、時間通りに仕事が進行しないという点では私も日本作家もかなりのストレスを感じた。



韓国から大きな作品もすべて自分たちで運んできた

展覧会準備中に大学の集まりに全員参加してくれと言われ、行ってみたら同窓生体育大会だったことがある。日本作家はサッカーよりも作品設置をしたいのだが、韓国側は「展示も大事だが遊ぶのも大事、展示は何とかなる」と半ば強制参加させられてしまった。さんざん運動して疲れ果てた後で「さあ設置作業の続きをしよう！」と深夜まで作業するという、遊びにも仕事にも全力投球の韓国作家のタフさには脱帽した。

最初の開催が韓国だったこととパートナー制が良かったようで、韓国で手厚いもてなしを受けた日本作家の心に「韓国って面白い」「日本でこのお返しをしたい」という気持ちがふつふつと湧きあがっていくのが傍目にも感じられた。パートナーが食事から移動などあらゆる面でサポートしてくれて「どこか行きたい？ 見たいものは？」と拙い英語で一生懸命コミュニケーションをとってくれるので、英語に不安を感じていた日本作家もこの韓国作家の積極性のお蔭でどんどん打ち解けていった。しかし彼らのリードがなかったら短期間でそこまで仲良くなれたかどうかは疑問だ。

韓国ではかなり受身的だった日本作家も日本開催の際には積極的に展示や滞在準備、交流活動をしてくれて、韓国での友情に心から応えたいという気持ちがちゃんと根づいていたことが表れていて嬉しかった。

論理的な韓国作家、感性的な日本作家

日本も韓国も似たような西洋美術教育を受け、同じように西洋中心の美術シーンを見ているので、作品表現形式は似た所が多いが、作品内容には特徴



韓国暎園大ギャラリーで協力して設置作業

的な違いがみられる。韓国作家は国や社会制度に対する自分の考えや心情を表現する作品が多くみられるのに対し、日本作家は自分自身の内面を通して人間存在そのものを見つめようとする作品が多い。そのアプローチも韓国作家は比較的論理的で合理的な分析を基に自分の考えを伝えようとするのに対し、日本作家は論理よりも情緒的で感性的な部分を前面に出すという違いがある。韓国作家の方がより感情的な作品表現をしそうに思われるが、美術教育が日本より西洋的であるという点が大きいかうだ。作品制作ではコンセプトを非常に重要視し、「なぜこの作品を作ったのか?」「なぜこの表現形式を選択したのか?」と問われ続けるのだ。日本作家も交流展を通してこの質問を韓国作家から何度も受けて、自分自身の作品制作について考え直す良い機会となったようだ。こうして出会った若手作家たちが、一度のプログラムの交流に留まらずに継続して刺激しあって活動する仲間になってほしいと願っている。

PROFILE

ひらまつ のぶゆき



1965年愛知県生。アーティストであり非営利アートスペース・プラスギャラリーの代表。実験的で試験的な現代美術の展示や若手アーティスト発掘、韓国をはじめ海外とのネットワーク構築など行う。主な企画展は「Double Bind」(アーツスペースヒュー, ソウル, 2005)「Readymade: Map」(トーキョーワンダーサイト渋谷, 2006)など。

企業の首都圏集中要因

70年代の重化学工業化の時期に進められた輸出インセンティブ政策や大企業への支援政策、そして立地政策はまさに、大量生産が利益をもたらす「規模の経済」を追求するための政策であった。80年代後半の民主化以降は、特定大企業や特定地域を優遇する政策から脱し、「均衡発展」を目指す政策がとられてきた。これらは、政治環境の変化により生まれた「民意」を反映したものであるが、賃金の上昇という生産面での問題、消費の多様化の進展などが、一国全体で規模の経済を追求することが困難になってきたことを反映したものであった。

立地選択はどの企業にとっても困難な問題である。その地域のインフラ、地価、平均賃金、労働力確保の可能性、販売ルート、協力企業、支援機関の存在などさまざまな要素を考慮して実施される。80年代以降、政府は均衡発展のために地域政策を推進しようとしてきたが、それにもかかわらず急速に進んできたのは首都圏への企業の集中であり、製造業で見た場合は、ソウル周辺地域への企業の集中であった。ソウルという市場の魅力やインフラの充実

などが首都圏への企業集中の主要因であったと考えられるが、実際に立地のメリットとしてどのようなものが存在していたのであろうか。今回は、ソウル郊外に位置する半月工業団地（京畿道安山市）に立地する企業を訪問したので、そのインタビュー調査からソウル周辺地域への立地と企業経営との関係に関して触れようと思う。

中堅企業P社の事例

P社は、現在従業員数850人（技能職、事務職はほぼ半々）の中堅企業である。主要生産品目は、石油ストーブ、厨房用家電、ビデなどであり、アメリカ、中東、そして南アフリカなどへの輸出も行っている。

P社の公式的なスタートは1974年で（ただし、実際のスタートは1970年からだ）、石油ストーブの芯の製造からスタートし、1980年度に半月に移転してきた。当初、韓国は石油製品を免税で輸入していたが、関税が付加され始めた時、価格競争力ができたと判断して部品の製造から開始したという。

半月に移る前はソウルの今ではオリンピック競技場になっている場所のそばに立地していた。しかし、1988年に行われるオリンピック開催に伴い政府から移転の要請を受け、80年に半月に移転した。半月への移転には、地価が安く（当時の土地価格は坪当たり3万400ウォン、現在は240万ウォンほどである）、銀行から



半月工業団地はソウル郊外でもっとも歴史のある工業団地である

容易に資金の融資を受けられるというメリットがあったが、当時の安山市周辺は交通事情が劣悪で、かなりの困難があったという。

現在、半月工業団地周辺には8000社ほどの企業が存在している。電子、皮革、繊維、染色などの会社が存在しているが、もっとも多いのは自動車部品関連会社である。以前は半月内に同業の企業も多く存在していたが、多くが撤退し、同業企業はそれほど多くはない。

半月工業団地への立地のメリットを挙げるなら、安山市民が80万人ほどいるということ、労働力が豊富であるということ、現在は交通状況も良く通勤に便利であるということ、協力企業が集中しているということである。なお、ソウル、仁川、水原、安養などから出勤する社員もいるが、特に管理職はソウルなど若干離れた地域から通勤しているという。

資金調達状況に関しては、会社を運営していく上で、常に問題となってきたことであり、97年の通貨危機以前には、支払い利子もかなりの額を占めていた。しかし、経済状況が回復してからは、むしろ銀行から融資をしたいという勧誘がくるという。

労働状況に関しては、管理職の場合は、専門大学（日本の短大に相当）卒



検査室。製造ラインの隣の部屋で綿密な検査が行われていた

業以上の学歴を有している。特別な教育プログラムは存在していないが、賃金水準は同業種に比べて若干高いほうであり、寄宿舎も存在する。しかし、離職率が高く、これが問題だという。ただし、資金調達環境が改善したこと、労働の定着率が低いことは、半月やP社に限ったことではなく韓国全体の状況であると思われる。

販売に関しては、35%ほどが輸出、65%ほどが内需である。P社の主要な輸出品目はストーブ、食器洗浄機、冷蔵庫、ビデオなどである。また、自社生産比率は40%ほどで、残りの60%ほどが外注である。特に大手電子企業への依存度は高く、売上額のほぼ25%がその大手電子企業のOEM（相手先ブランド）生産である。

原材料に関しては、主に、近隣の企業から調達しているが、コンプレッサーは光州、韓国内で生産されていない部品に関しては日本からという形をとっており、重要な部品に関しては遠隔地域からも調達している。また、最近では中国製の部品が安いと、中国からも輸入している（なお、中国からの輸入は仁川港から、輸出の場合は釜山港を通じて行っている）。

また、半月工業団地の管理事務所から何か支援を受けているかについては、半月に移転してきた初期には、何度か訪問したが、今はあまり事務所に



工場の外観。工場内部も広く感じられた

行く機会がないとのことであった。そのため現在は支援も受けていないし、不利益も受けていない状況である。

工業団地の環境変化

現在、もっとも大きな不安要因は、為替の不安、原材料価格の上昇、大企業からの価格引下げ要求である。大企業からの価格引下げ要求はOEM生産がある限り避けることができず、これを回避しようとするならOEM生産比率を引き下げなくてはならないが、P社は自社ブランド生産も積極的に進めているようである。

今後の展望としては、中国との価格競争を回避するため、専門特化を進めると同時に、昨年建設した中国国内の工場の生産を充実させるという。また、韓国の工場に関しては、今後拡大していく考えはないとのことであった。

忙しい中、インタビューに応じてくださったのはP社の理事であった。落ち着いた感じの人であったが、それは零細企業から優良企業といわれるまで

に会社を成長させてきた自信と余裕から来ているように思われる。

今回は、半月という工業団地の立地環境について実際のインタビューを通じて明らかにしてきた。P社の半月への移転理由や移転当初のメリットに関しては若干特殊だといえるが、半月を取り巻く環境の変化に関しては、インフラの充実、同業企業の撤退などで大きく変化してきたことをインタビューから確認できた。さらに半月立地のメリットに関しては、協力企業が周辺に多く存在していること、仁川港が近いこと、交通の便が良いこと、労働力が豊富なこと、ソウルという市場が近いことなどが挙げられ、ソウル郊外への企業集中の要因が明らかになった。



P社主力製品の模型の小型冷蔵庫

PROFILE

いなば さとし



漢陽大学校経済研究所外国人研究員。経済学博士。神戸大学大学院経済学研究科を修了。研究分野は「韓国の中小企業に関する実証分析」であり、主に産業組織論のアプローチにより分析を行っている。現在は産業立地に関する研究を行っている。

日韓文化交流基金事業報告

2007年度訪日・訪韓フェローシップ採用決定

2007年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）の採用者が決定しました。訪日57名、訪韓6名の応募があり、このうち訪日は20名、訪韓は3名が採用されました。

訪 日						가나다順
No	氏 名	所 属	職 位	研究テーマ	受入機関	開始日 終了日
1	金順英	聖公会大学校 社会文化研究院	研究助教授	日本における女性社会権に関する研究： 制度的構造と社会的構成を中心に	東京大学 社会科学研究所	2007.4.1 2008.2.29
2	金銀恵	ソウル大学校大学院 社会学科	博士課程修了	1980年代以降、都市再開発と文化戦略についての研究 －日韓比較研究（東京・ソウル）－	一橋大学大学院 社会学研究科	2007.10.1 2008.8.31
3	金仁洙	ソウル大学校大学院 社会学科	博士課程修了	日本における情報宣伝の文化政治学、1937-1952	東京大学大学院情報学 環・学際情報学府	2007.9.1 2008.7.31
4	金在弘	韓国国立中央博物館 学芸研究室	学芸研究官	5-7世紀における韓日の中央と地方：古墳文化と出土文字資料 の分析を中心に	国立歴史民俗博物館	2007.4.1 2008.2.29
5	金憲奎	東京大学 生産技術研究所	研究員	韓国における鉄道建設による「邑治」の変容に関する研究	東京大学 生産技術研究所	2007.4.1 2008.2.29
6	南有美	三星美術館保存研究室	専任研究員	韓国と日本の表装様式及び製作技法の比較研究	東京学芸大学 教育学部日本画研究室	2007.4.1 2007.6.30
7	文成炫	勤労福祉公団 研究センター	責任研究員	医療と介護の費用における地域間格差の要因分析と適切な機能分 担に関する研究－地域間格差の日韓比較調査研究を踏まえて－	日本福祉大学大学院 社会福祉学研究科	2007.9.1 2008.7.31
8	朴範哲	東国大学校 師範大学教育学科	講師	日本の死生学研究の動向と課題	東京大学文学部 宗教学・宗教史学研究室	2007.6.1 2007.8.31
9	朴貞蘭	仁済大学校人文社会科学 大学社会福祉学科	助教授	高齢者長期ケアにおけるケアマネジメントシステムに関する研究 －日本と韓国－	神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部社会福祉学科	2007.4.1 2008.2.29
10	朴花珍	釜慶大学校 人文社会科学大学史学科	教授	近代初期における日本国民国家の成り立ちと東アジア社会への 影響	国立歴史民俗博物館	2007.10.1 2008.8.31
11	徐甫京	高麗大学校 日本学研究センター	研究助教授	5世紀の百済と倭国 －『宋書』にみられる倭王の「百済軍事」号要請と関連して－	東京大学史料編纂所	2007.4.1 2008.2.29
12	宋善英	韓国教育開発院 教育政策研究部	専門研究員	日韓間高等教育の質的向上と質の保証政策に関する比較研究	国立教育政策研究所 高等教育研究部	2007.4.1 2008.2.29
13	申宗大	釜慶大学校人文社会科学 大学日語日文学部	助教授	武家政権における側近政治の研究	東北大学大学院 文学研究科	2007.7.1 2008.5.31
14	尹載善	翰林聖心大学 地方行政学科	教授	諸国自治体間の協力機能としての一村一品運動研究	大分大学経済学部	2007.6.1 2007.8.31
15	尹洪錫	財団法人 極東問題研究所	責任研究委員	日本と北朝鮮の国交正常化交渉：実際と教訓	早稲田大学 アジア研究機構現代韓国研究所	2007.4.1 2008.2.29
16	李鎭哲	高麗大学校 亜細亜問題研究所	責任研究員	河合栄治郎の政治思想－理想主義と自由主義－	早稲田大学大学院 政治学研究科	2007.7.1 2007.9.30
17	李震鎭	東西大学校デザイン学部 視覚情報デザイン学科	教授	ブランド資源概念を導入した新聞媒体のデザイン戦略	千葉大学大学院 自然科学研究科	2007.6.21 2007.8.20
18	鄭丞恵	水原女子大学 人文社会学部	副教授	日本所在近代時期韓日二重言語学習書の考察	大阪外国語大学 外国語学部	2007.9.1 2008.7.31
19	崔ゴウン	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所	研究員	日・韓中世寺院建築における意匠表現の比較研究－斗拱の表現 方法を中心に－	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所	2007.4.1 2008.2.29
20	黄達起	啓明大学校 国際学大学日本学科	国際学研究所長	日本の都市祭礼と地域社会 －福岡市と北九州市の「祇園山笠」を中心に－	九州大学 韓国研究センター	2007.6.1 2007.8.31

訪 韓

50音順

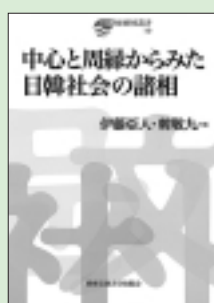
No	氏 名	所 属	職 位	研究テーマ	受入機関	開始日 終了日
1	石川亮太	佐賀大学経済学部	助教授	韓国開港後の東アジア国際市場への編入過程 —中国人商人の活動を中心に—	ソウル大学校 奎章閣韓国学研究院	2007.4.1 2008.2.29
2	砂本文彦	広島国際大学社会環境科学部建築創造学科	助教授	日本統治下朝鮮半島における国際観光地・リゾート地開発に関する研究	成均館大学校工科大学 建築学科近代建築研究室	2007.8.1 2007.9.30
3	中村大介	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助手	韓半島青銅器時代における流通構造と地域間交流	高麗大学校 考古環境研究所	2007.4.1 2008.2.29

※所属機関・職位は申請時点のものを掲載

日韓共同研究フォーラム

日韓共同研究フォーラムの第3次研究タームの成果として、「日韓共同研究叢書」の第19・20巻が慶應義塾大学出版会から刊行されました。

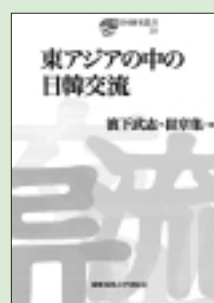
文化・社会チーム



第19巻 『中心と周縁からみた 日韓社会の諸相』 (伊藤亞人・韓敬九編)

都市と農村、伝統と家族関係の変容などを「中心と周縁」の視点から解明し、あらたなる日韓の社会像を構築する。

文化交流チーム



第20巻 『東アジアの中の日韓交流』 (濱下武志・崔章集編)

日韓交流が東アジア・ネットワーク形成に果たした役割を、文化・産業・経済・政治の諸分野から検討し、今後のあるべき姿を探る。

「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

韓国図書翻訳出版事業により、「韓国の学術と文化」シリーズの以下の図書が法政大学出版局より刊行されました。

『朝鮮後期の郷吏』 (李勛相著、宮嶋博史訳)

朝鮮王朝時代、在地の両班と共に地方行政の実務を担当した郷吏について、膨大な資料に基づき、地方統治や民衆文化面において果たした機能と役割を解明する。

『現代韓国の地方自治』 (趙昌鉉著、阪堂博之・阪堂千津子訳)

30年間の空白を経て1990年代に復活した韓国の地方自治について、その意義と本質、独自の特徴などを、2005～2006年の法改正までを含めて概観・考察する。

報告書

以下の報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

- 訪日学術研究者論文集—一般— 第十三巻 (2004年8月～2006年3月)
- 訪日学術研究者論文集—歴史— 第十巻 (2004年8月～2005年10月)
- 訪韓学術研究者論文集 第七巻 (2005年4月～2006年2月)
- 日本大学生訪韓研修団＜外交通商部招聘＞ (2006年10月17日～10月26日) 報告書

訪日団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
済州青年	高友芳 「正しい暮らし」運動 会長	15	7	8	1/9-1/18	東京外国語大学、名古屋大学
釜山日本語弁論大会 入賞者等	崔光祐 蔚山大学校日本語日本文学科 教授	15	8	7	1/9-1/18	横浜国立大学、松山大学

訪韓団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
日本大学生 (第1団)	奥園秀樹 広島国際学院大学 現代社会学部 助教授	18	6	12	3/6-3/15	慶熙大学校(ソウル)、忠南大学校(大田)



名古屋大学でLEDの研究業績について説明を受ける済州青年訪日団



防災館で応急手当を体験する釜山日本語弁論大会入賞者等訪日団

維持会員

2006年12月1日～2007年2月28日の期間に、7名の方に維持会員制度にご加入いただき、7万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます。(五十音順、敬称略)。

個人会員 7名

菅野修一 権五定 桑野栄治 武末純一 寺岡伸悟 中尾美知子 林安秀

図書センターウェブサイトリニューアル

図書センターのウェブサイトが一新され、より見やすく、情報を探しやすくなりました。

日々の新着資料がトップページに表示されるようになったほか、開館情報やセンターからのお知らせが一目で確認できるようになりました。

また、「レファレンス」では、図書センターでお受けした所蔵資料に関するご質問とその回答の一部をご紹介しており、今後徐々に内容を増やしていく予定です。

<http://www.jkcf.or.jp/library>

「レファレンス」で ご紹介している例

- キムジャン前線(キムチ前線)
- 童話「소나기(ソナギ)」の原文(韓国語)
- 韓国の財団・団体の日本事務所の連絡先
- 韓国人の海外留学数(国別)
- 韓国の伝統音楽 など



訂正とお詫び

日韓文化交流基金NEWS第40号3頁「第6回日韓歴史家会議」参加者の記事において、佐々木隆爾先生のご所属を「日本大名誉教授」と表記しましたが、正しくは「東京都立大名誉教授」です。佐々木先生をはじめ関係各位にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。